

会話の構築

2013/3/17 埼玉交流会

藤坂龍司

はじめに－「自然な会話」への遙かなる道

「自然な会話」は自閉症療育にとって究極の目標の一つ。しかしそこまで到達できる子どもは少ない。まずは「きちんと受け答えできる」ことと「自分の意志をしっかり伝える」ことから。それができたら、さらに上を目指そう。

会話は相手の話しかけに対する応答と、こちらからの自発的な話しかけの二つの要素から成る。応答も自発もどちらも大切だから、どちらか一方に偏らないようにバランスよく教えるなければならない。ここでは応答、自発の順に説明していく。

A. 基礎会話プログラム

1. 応答を教える

(1) 社会的応答

中級前半のプログラム。応答プログラムの始まり。各質問に対する答えが決まっているので、子どもが覚えやすい。

①社会的質問

「お名前は?」「何才?」「何組さん?」「何幼稚園?」「何が好き?」

最初の二つ(例:「お名前は?」と「何才?」)を教えたら、その二つをランダムな順番で聞き、10回中8回以上正解するまで続ける。

②非エコー型あいさつ

「ただいま」→「おかえり」「いってきます」→「いってらっしゃい」「どうぞ」→「ありがとう」など。

<オウム返しの矯正>

こちらの質問やあいさつをまねしてしまう場合(例えば「ただいま」というと「ただいま」とエコーしてしまう)、どう修正したらよいか。

①まず子どものせりふだけを言ってまねさせ、強化する。「おかえり」→「おかえり」

②次にこちらのせりふを、子どもがまねできないほど小声ですばやく言い、その後直ちに子どものせりふを大きな声で行って、子どものせりふだけをまねさせる。

「ただいま。おかえり」→「おかえり」

③答えを言わせるプロンプトを徐々に減らして行く。と同時に、呼び掛け文を徐々に普通の言い方に近づけて行く。

「ただいま。おか…」→「おかえり」

「ただいま。お…」→「おかえり」

「ただいま」→「おかえり」

(2) Yes/No

事実のイエス・ノーより意志のイエス・ノーの方が教えやすいので、先に教えること。

<意志の Yes/No>

好きなものと嫌いなものを用意する。好きなものを口に持っていき、「いる」と言ってやり、まねさせる。「いる」と言えたら与える（最初から「いる？」と聞くと、それをエコーしてしまうので、わざと質問せず、無言で口に持っていく）。

次に嫌いなものを口に持っていき、嫌そうにしたら「入らない」あるいは「いや」と言わせる。引っ込める。これを繰り返す。嫌いなものを「いる」と言ったら、無理にでも食べさせる。

ある程度上手になってから、初めて質問を導入する。好きなものを口に持っていき、「いる？」と聞いて「いる」と言わせる。嫌いなものを口に持っていき、「いる？」と聞いて「入らない」と言わせる。

「いい」と「いや」も同じやり方で。「キスしていい?」「たたいていい?」

<事実の Yes/No>

事実のイエス・ノーは難しいので、できるだけハードルを低くする。最初から「うん」と「ううん」を両方言わせるのではなく、その物の名前（「リンゴ」）を言ってやり、それが合っているときは名前をエコーさせ（「リンゴ」）、違っているときだけ「ちがう」と言わせること（「ううん」は「うん」と発音が似ていて紛らわしいから）。

リンゴを見せて「これ、バナナ?」「ちがう」「これ、スイカ?」「ちがう」「これ、リンゴ?」「リンゴ」

最初は「ちがう」の方からスタートし、プロンプトして正解させる（「ちがう」と言ってやる）。プロンプトがいらなくなったら、「これ、りんご?」と正解を言ってやり、「りんご」と言わせる。正解がいつも3番目にならないように気をつける。

(3) 質問の弁別

質問の弁別はとても難しい課題なので、最初はいろんなヒントを出して、わかりやすくすること。教材も慎重に選ぶ。

<「これ何?」「色は?」>

色のはっきりしたコップなどを使う。「これ何?」と「色は?」の違いに気づかせるため、いろんな工夫（プロンプト）をする。

- ① 仕草を変える（「これ何?」は両手でコップを持つ。「色は?」はコップの表面を指さす）
- ② 質問の声の高さを変える（「これ何?」は高く、「色は?」は低く）
- ③ 質問の声のスピードを変える（「これ何?」は速く、「色は?」はゆっくり）

質問のことばも、「これ何?」と「何色?」だと、「なに」の部分が共通なので紛らわしい。そこで「何色?」の代わりに「色は?」と言う聞き方をするとよい。

ランダムローテーションで区別ができたなら、①～③のプロンプトを徐々にフェードアウトし、「これ何?」と「色は?」の言葉の違い以外の違いをなくすようにする。それができたら仕上げとして、「色は?」の代わりに「何色?」という本来の自然ないい方に変える。

「これ何?」と「色は?」の区別がついたなら、「何の仲間?」「何するもの?」「どんな形?」「何個?」など、物に関するそのほかの質問も順次教えて行く。

<「だれ?」と「どこ?」>

家族の誰かが、家のどこかわかりやすい場所（トイレ、お風呂、台所など）にいる写真を使う。

写真は一枚に絞り、徹底的にランダムローテーションで「だれ？」と「どこ？」の区別を教えて行く。
プロンプトとして、

- ① 指さしの位置（「誰？」の時には人の顔を、「どこ？」の時には背景にあるわかりやすい物を指さす）
- ② 声の高さを変える
- ③ 声のスピードを変える

を用い、区別がいたら、徐々にプロンプトをフェーディングして行く。

「だれ？」と「どこ？」の区別がいたら、「何してる？」も教える。

2. 自発的な発話

(1) 要求の自発

一番簡単なのは要求の自発。最初はプロンプトして要求のことばを言わせ、言えたら要求を小出しにかなえてあげる。徐々にプロンプトをなくしていく。

難しいのは複数の要求の言葉を使い分けることを教えること。そのためには複数の要求の機会を時間を接近させて提供し、ランダムに言わせることが必要（両手を出して「だっこ」と言わせ、次はお菓子を見せて「ちょうだい」と言わせるなど）。

(2) 叙述の自発

まずテーブルの上に子どもが名前を知っているものをいくつか並べ、子どものそばにすわって、右から一つずつ指さしながら子どもにもそれをまねさせる。と同時に、指さしたものの名前を言わせていく。こちらが「これ何？」と聞くのではなく、自分から目の前の物の名前を言うように仕向ける。

デスクで言えるようになったら、家のいろんな場所に、さらには家の外に般化していく。子どもが好きそうなものがあったら、「あっ」と声をあげながらその方を指さし、子どもにその物の名前を言わせる（「パトカー」）。必要なら頭文字を言ってプロンプトする。言えたら「そうだね。パトカーだね」を共感してあげる。

(3) 質問の自発

① 「これ何？」

テーブルの上に子どもが名前を知っているものをいくつか並べ、その中に一つだけ、名前を知らないものを混ぜておく（5つのうち4つ目か5つ目がよい）。叙述の自発の要領で、端から名前を言わせていく。知らない物のところに来たら、プロンプトして「これ何？」と言わせる。言えたら強化。最初は答えを教えない。最後まで名前を言えたら、もう一回最初から。やはり「これ何？」と言わせる。

<答えを覚える>

三巡目によりやく答えを教える。教えたら、今度はそれを覚えて、5巡目くらいからはもう「これ何？」と聞かずに、教えられたその物の名前を言うことを求める。そうでないと、知らないものについて「これ何？」と言えればいい、ということだけを覚えて、質問によって知識を得る、ということをしなくなるから。

② 「どこ？」

物を隠して、子どもに探させる。最初は見つけやすい所に隠し、見つけたら強化する。何回か繰り返した後、今度はわかりにくい所に隠す。子どもが困っていたら「どこ？」と言ってまねさせる。子どもが「どこ？」と言えたら、あるところを教えてあげる。

日常生活に般化させる。何か探していたら「〇〇どこ？」と言わせる。

外出するときは「どこ行くの？」と聞かせるとよい。

③「だれの？」

お菓子をテーブルに置く。「誰の？」と聞かせる。「ママの」と答えてあなたが食べる。またお菓子を置いて、「誰の？」と聞かせ、「〇〇ちゃんの」と子どもの名前を言う。子どもに食べさせる。

④「どうして？」

おもちゃで遊ばせておいて、しばらくしてから「それ、ちょうだい」という。子どもが嫌そうにしたら、「どうして？」と言わせる。言えたら「プリン食べるから」などと言ってその子の好物を出す。

B. 上級会話プログラム

1. 応答

(1) 情報交換的応答

叙述の話しかけに対して、それに相応する自分の側の情報を提示することを教える。例えば、

「ぼく、パパと水族館に行ったんだよ」

「ぼくはパパとディズニーランドに行ったもんね」

子どもの話にはこの手の「自慢のし合い」が多い。これが情報交換型会話である。

まずは簡単なシチュエーションで。子どもにりんごを持たせ、大人がバナナを持つ。大人が「こればバナナ」と言う。子どもに「これはりんご」と言わせる。

続いていろいろな物を持たせて、

大人「これは車」子ども「これは新幹線」大人「これはぞうさん」子ども「これはキリン」...

などと次々にやり取りしていく。

徐々に物の名前だけでなく、動作や物の特徴などの情報をやりとりする。

「ママはバナナを持ってる」「〇〇はリンゴを持ってる」

「ママはバナナ食べてる」「〇〇はリンゴ食べてる」

「バナナは黄色」「リンゴは赤」

「バナナはくだもの」「リンゴはくだもの」

さらに自分の特徴や経験などの情報のやり取りに発展させていく。

「ママはスカートを履いてる」「ぼくはズボンを履いてる」

「ママは女の子」「ぼくは男の子」

「ママはお昼におにぎりを食べたよ」「ぼくはお昼にうどんを食べたよ」

(2) 適切な質問を返す

相手の叙述的話しかけに対して、適切な質問を投げ返すことを教える。

最初は質問を引き出しやすいキーワード（「いいもの」「いいところ」など）を使って質問を促す。

「おかあさん、コープでいいもの買ったんだ」「なに買ったの？」「プリン。食べる？」「うん」

「ママ、いいところ行ったんだ」「どこ行ったの？」「ケーキ屋さん。ケーキ食べる？」「うん」

次にキーワードをそれ以外の言葉（「買い物」「新幹線」など）に広げて行く。

「ママは昨日、スーパーにお買い物に行ったんだよ」「何買ったの？」「プリン。食べる？」

「ママはバスに乗ったんだよ」「どこに行ったの？」「おばあちゃんち。おみやげ買ってきたよ。」

「なに？」「シュークリーム。食べる？」「うん」

このように「お買い物」と聞けば「何買ったの？」、「新幹線」と言えば「どこ行ったの？」と決まっ

た質問ができるようにするとよい。

情報交換型の応答との使い分けを教える。例えば最初の話しかけには、なるべく質問をする（相手の話しかけに興味を持つのが礼儀だから）。二つ質問したら、あとは情報交換型応答をしてもよいということにする。

「ママ、足をけがしちゃった」「へえ。どうして?」「ころんじゃったの」「どこで転んだの?」
「お外で」「ぼくもけがしてるよ。ほら」

(3) 相づち

相手の話しかけに対して、すべて質問や情報交換で返すのも不自然である。特にどちらも思い浮かばない場合は、「へえ」「ふーん」などの相づちで返すことを教えるとよい。

「チョコビ（お菓子の名前）ってね、チョコレートでできてるんだよ」
「へえ」（最初はこちらが「へえ」と言ってやり、まねさせる）

(4) 感想コメント

相づちをもう少し発展させ、相手の話しかけに対して、感想コメントを言うことを教える。

「ママね、今日、お外でケーキ食べたんだよ。」「いいなあ」「いいでしょ。〇〇ちゃんの方も買って置いたよ。食べる?」「うん、食べる」（ケーキが強化子）

「ママ、お外でころんじゃった」「かわいそう」「ありがとう。やさしいね」（ムギューして強化）

(5) 感想プラス1

感想を言うだけでなく、さらに一言何かを言わせる。

「ママ、お外でころんじゃった」「かわいそう。薬つけたら」（感想+提案）
「ママ、お外でケーキ食べたんだよ」「いいなあ。ぼくも食べたいなあ」（感想+感想）

B. 話しかけ

基礎会話プログラムの要求の自発、叙述の自発、質問の自発を発展させて、会話のきっかけになるような話しかけを自発させる。

まずは大人に対する話しかけを促す。それができるようになったら、お友だちに話しかけることを促す。

(1) 呼びかけ

何か用があるときに相手の名前を呼んだり、「ねえ」と声をかけることを教える。

「おやつ食べるよ。パパ呼んできて」「パパ」（パパは聞こえないふりをする）
「ねえねえ、って言ってごらん」「ねえねえ、パパ」「なあに?」「おやつ食べよ」「うん」

(2) 提案、誘い

パパをゲームに誘わせる。「パパ、ゲームしよう」「いいよ」

家族を自分の好きな遊びに誘わせる。「かくれんぼする人、この指とまれ」

(3) 報告の自発

その日あった出来事を自発的に親に報告させる。

例えば幼稚園から帰ったら、おやつの準備をして食卓に着かせて、子どもに「今日、幼稚園どうだっ

た？」と聞く。子どもが「今日、幼稚園でダンスした。お弁当食べた」などと言えたら、ほめておやつを食べさせる。

上手になったら、「今日、どうだった？」と聞く代わりに、「ねえねえ、ママ、今日、幼稚園で…」と言ってやり、それをまねしてからその後を続けさせる。できたらおやつで強化。徐々にプロンプトをフェーディング。最終的に、幼稚園から帰って食卓テーブルに着いたら、それを合図にして、自分から「ねえねえ、ママ」と話し始めるようにさせる。

この「ねえねえ、ママ」はお母さんに話したいことがあるときの、共通の話しかけ方として使わせるとよい。

(4) 自分の関心事を人に伝える

例えばあなたの子どもが車にとっても詳しいとする。そしたらその知識を他の人に伝えてほめてもらおう。

「パパにね、『ねえねえ、パパ、フィットってね、ホンダのコンパクトカーなんだよ』って言ってごらん」

「ねえねえ、パパ、フィットってね、ホンダのコンパクトカーなんだよ」

「そうなんだ。パパ知らなかったよ。よく知ってるね」

(5) 自分のことを言ってから相手のことを聞く

自分のことを一方的に言うだけではなくて、その後相手のことを聞くようにすると、会話がスムーズである。

「まおはね、プリキュアが好きなの。えりちゃんは？」「えりもプリキュア好き」「ほんと？いっしょだね」

(女の子は、「いっしょだね」と言って相手と自分が何かを共有していることを喜び合う傾向があるので、このパターンを覚えさせるとよい)

C. 会話に関する諸問題

☆同じ質問を繰り返す

2回までは答えてあげるが、3回目で「もういわない」と冷たく制止する。あとは一切答えない。

☆呼びかけや質問に返事をしない

返事をしないときは、身体を捕まえて、返事を促す。返事したら離してあげる。

☆自分のことばかりしゃべる

自分のことばかりしゃべるときは相手をしないことによって消去する。それ以外の話題になったときに注目してあげる。

☆話題を勝手に変えてしまう（話題のキープ）

急に話題を変えたら、それには反応しないで、元の話に戻す。効き目がなかったら、「いまその話じゃないでしょ」とことばで注意して見る。話題を変えたいときは「別の子と言っていい？」と相手に聞いて許可を求めさせる。